

# 宿縁

八月号

## 目覚めは どのようなにして 起こるか



仏教の教えが身につくことは容易なことではありません。しかし容易なことではないがゆえに、日々の生活に追われて過ごす私たちのために仏教はあるのだといただくことが大事です。

日々の生活に追われるとは、どうでもよいことに身心を費やし、人生でもっとも大事なことを他人事と見て過ごすことです。これはせっかく仏教の教えを聞く身になってもしっかり仏教の教えを聞く身になってもしっかり聞いているだけで、わが身のこととして聞いていないということでもあります。

千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号  
浄土真宗  
本願寺派  
**中原寺**

TEL 〇四七―三七二一―〇二九二  
FAX 〇四七―三七二一―〇二六二

ここに紹介するのは、ある冊子に掲載された「真実(まこと)に出遇う喜び」と題した或る女性の一文(抜粋)です。

『今から37年前に義母が亡くなってからお寺とのお縁をいただき、それまで祀られていた神棚に代わって真新しい真宗の仏壇が安置されますと、生活は一変いたしました。

毎朝ご仏壇の前に座ってお参りにはじまり、月に一度の月忌参り、そして、お寺のご法要にも参詣するようになりました。やがて、子どもたちは少年会に、私は若婦人会に入れていただき、寺院は決してお葬式や法事を勤めるだけではなく、仏さまのお話を聞かせていただく所だということが分かってまいりました。

しかし、幸せなはずの私たち家族の前に「まさか」という坂が突然あらわれ、私たちの生活がまた一変させてしまったのです。

平成5年11月、23歳の長女は発熱と頭痛を訴えて県立総合病院にて受診、肺炎との診断で入院。そして数日後、諸検査の結果「血液に異常がありそう、もしかしたら」と、思ってもみない衝撃的な医師の言葉に頭の中は真っ白になりました。

何かの間違いではないかと耳を疑いながら、夫と二人、交わす言葉もなく無言

で薄暗い病棟の廊下を歩いて帰ったことを今でもはつきりと覚えております。

血液の異常を告げられたその日を境に、日頃の学びはどこへやら、藁にもすがら思いは日ごとにくらんで、遂には、神様どうか娘を助けてくださいと神頼みに走り、また時には、県外の神社仏閣を訪ねて護摩を焚いての祈禱をしたりと、娘が助かる道を求めて必死に歩き回っておりました。

平成6年4月、微熱が続くので再入院。間違いであってほしいとの願いも虚しく「急性骨髄性白血病」との診断が下り、治療が始まります。11月になり、次女の骨髄液が点滴によって長女に移植されました。しかし、その治療の甲斐もなく、12月6日午前1時5分死亡が確認されます。

「娘よ、お疲れさま。えらかったね、よく頑張ったね、立派だったよ」と声をかけ、手を握り、頭をなでました。肩の点滴による内出血の跡が痛々しく、どんなに辛かったでしょうに。自宅に戻ると、一晩冷たくなった娘と並んで寝ました。

正直申しまして、私にとつてみ教えをしあわせへのお育てといただきましたのには、随分と時間がかかりました。常々お寺参りをして、機会あるごとに法話を聞かせていただいたはずの私ですので、今思いますが、いつも他人事として聞いていたのではないかと思います。

そんな私に仏様と真正面から向き合う絶好のチャンスがまいったのは、ご本山の中央教修で、ある先生に娘の死別の苦しさがありつた吐露した時でした。すると、先生は「顔を上げて前を見てご

らん。前を向いたら、娘さんに会えるんですよ」と。決して娘は私の後ろにはいないことを教えていただきました。

まっすぐお浄土へ一歩一歩、歩みを進めている私なのに、娘が私の進む方向に居ることがわかりませんでした。私は娘のいるお浄土へ向かって歩いている。そのことに気が付いたら、「そうだ、前を向いて歩いて行こう」と決心しました。「真実に出遇う喜びは温かい」と先生はおっしゃいました。長い間探していたものが見つかった喜び、強情な私だからこそ、娘が命がけで私の善知識となって導いてくれたのだと思いますと、おろそかにしてはならない、大切に仏法を聞かせていただこうと改めて思ったことです。』

この女性の信仰告白はひとり彼女のことはなく、私たちに共通する心のありようだと思います。

親鸞聖人ご自身がただ念仏の教えに帰すということをはつきりと示すのが、「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひと(師法然聖人)のおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。」(歎異抄)という言葉です。

この言葉は、念仏すれば阿弥陀仏にたすけてもらえるんだよということではありませぬ。阿弥陀仏にたすけられなさいということでは、あなたは阿弥陀仏によってたすけていただかないといけない人間なんだという、人間観の転換がここにはあるのです。それは、あなたは自分で自分のことをたすけられると思っているのかという、そういう言葉として読むときに真実との出遇いがあります。